古墳の真意

～隠された真実と、本来の目的～

中央中等教育学校　　1年　　須田　勇之春

（返却希望）

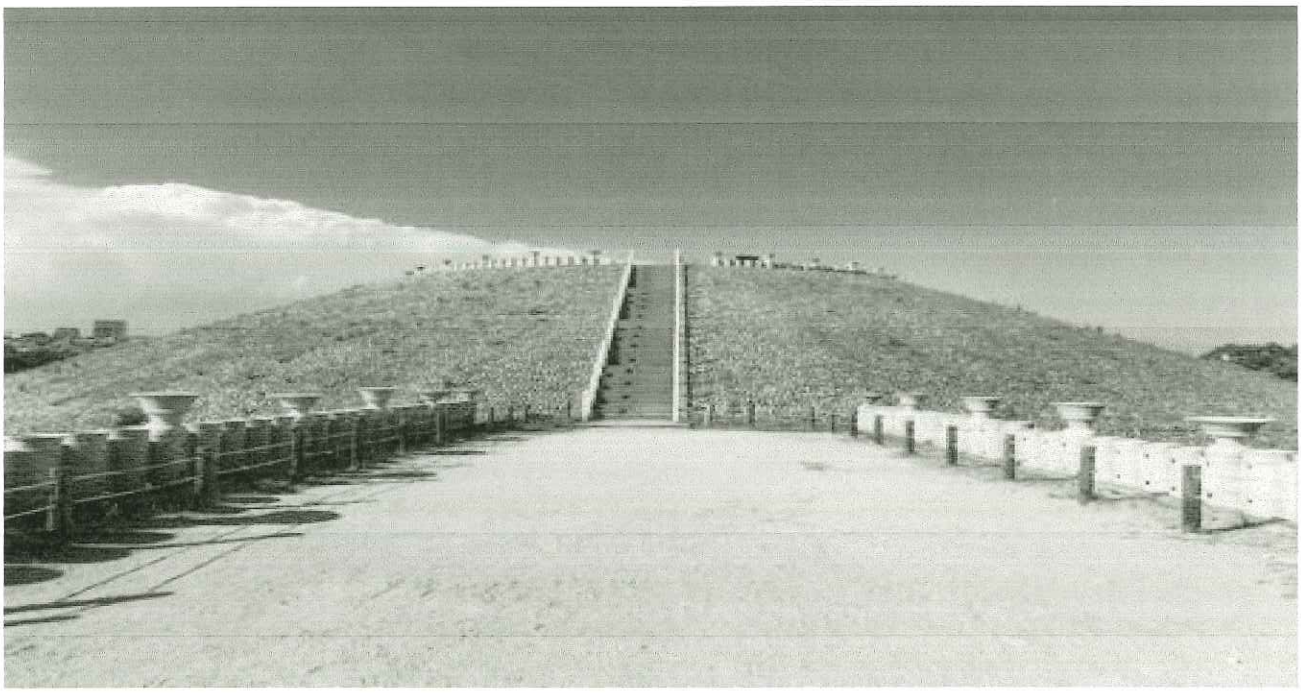
～研究のきっかけ～

古墳という存在を知ってから、ずっと疑問に思ってきたことがありました。
それは、人を葬るために、なぜ、家来たちが従って、長い年月を経て、あんなにも大きな古墳をつくるのか？ということです。
　古墳の目的は今や、権力を示すためなどと言われていますが、僕は、いまだにそれを信じることができないのです。それは、日本最大級の大きさを誇る、大山古墳(仁徳天皇陵古墳)の、制作の試算を見ていただければわかります。大山古墳は、一日に最大2000人が働き、15年8カ月で完成すると、試算されています。
こんなにもたくさんの人が年中無休で働いて、墓としての役割を果たす、古墳を作成するのは、少し現実的ではないと思います。もし家来に大王が、褒美を与えていたとしても、この大人数に与えるのは、少し、リスクが高いと思います。そこで、僕は、古墳作りにほかの、メリットがあったであろうと考え、古墳の真意を考えてみたいと思います。

～仮説と理由～

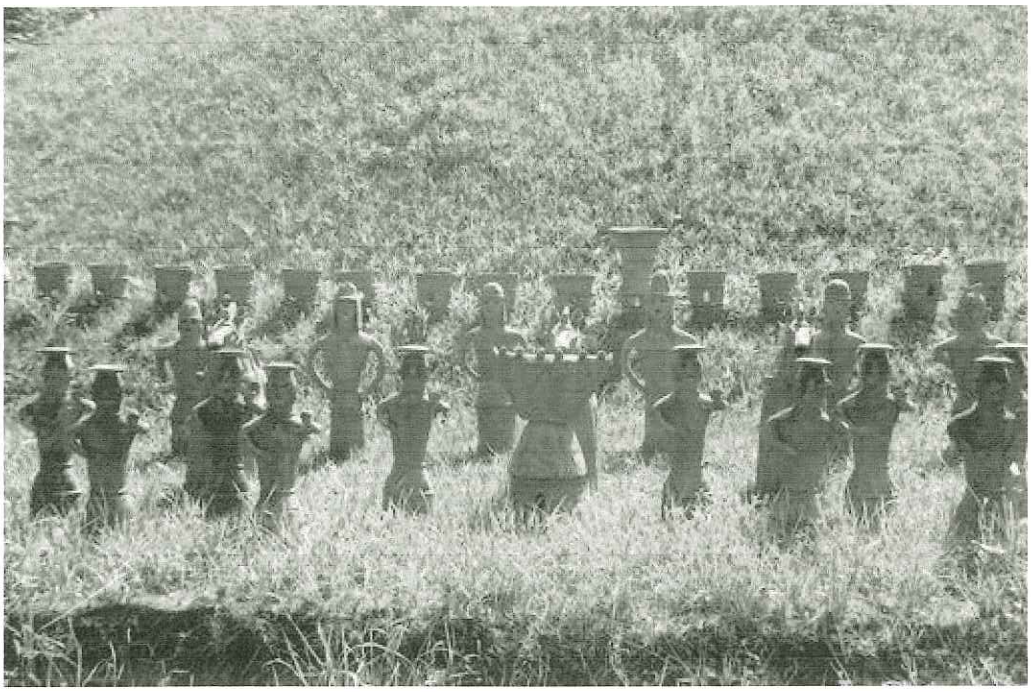
前置きが長くなりましたが、仮説のほうに移っていきたいと思います。実際に僕が考えた仮説を、理由とともに説明していきたいと思います。

僕が考えたもう一つのメリットは、古墳の戦いに応用できる、ということです。
その理由は、当時の武器の多くは、鉄刀などであったとされているため、相手の動きを知ることはとても大切です。
古墳は遠くまで見えるの？と自分で疑問に思ったので、実際に古墳に行ってみると、遠くの山のほうまで見えて戦いに使えそうな場所だと思いました。



さらに、昔は、高地は戦いに有利とされ、非常に重宝されたそうです。それで各地に古墳が広がっていったという流れなら、全体的な辻褄もあっていて、家来たちも働く気になるでしょう。
面白いのは、ここから、古墳といえば皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？僕は、埴輪を思い浮かべます。
埴輪は出土品も多く、知っている人も多いと思います。

古墳の周りには埴輪がたくさんあります。



もし、古墳が戦いに使われていたなら、周りにたくさん埴輪があれば、相手の足止めとしての役割を果たしてくれます。
又、埴輪の素材である素焼き土器は、壊せば、音が鳴ります。
すると、相手は不利な状況になるでしょう。なぜなら相手の敷地内で音を鳴らせば当然、声援を読んでしまうからです。又、埴輪には戦いの短甲などを身にまとっているものもあり、大きいものは、壊さないで、通過するのは難しく、戦いに非常に密接に関係してると考えることができるでしょう。今は埴輪は、死者の魂を守ったり、沈めたりするものとされていますが、このような考え方もできるのではないか、と思います。
このような理由から、古墳を戦いに生かしたり、利用したりしていたのではないかと僕は考えます。
それを墓としても利用できるのならば、一石二鳥で、
家来たちも働く気になると思います。

ですが、これだけの理由では、大山古墳のように15年もの長い期間を働こうとは思わないと思います。
なので、更なる理由を探していこうと思います。

こちらは大山古墳ですが、見ての通り古墳の周りに、池があります。このように、古墳の周りに彫られて、水が溜まっているところのことを“周濠”というそうです。
この周濠は、引用すると、“水があるとその中にはなかなか入っていけないし、中のものがなぜか特別（とくべつ）なもののように見えます。濠（ほり）に水をためるために堤をつけるようになりますが、そうしたいろいろな囲みがよりいっそう人を古墳に入れなくして、できるだけ大きく見えるようにもなりました。”というのが、きっかけで作られたそうですが、この考え方を少し変えると、ほかの見方があるような気がします。
というのも、戦いに生かすということです。
水があれば古墳の中に入るのが困難ということは、一見戦いに使えそうだと、思うかもしれません。
ですが、それは残念ながら不正解です。
その理由はまず2つあります。
1つ目は、相手は攻めにくいが自分たちも攻めずらいということです。これは、考えやすいと思います。

水があれば通る道はほぼ限られるため守りを固める代わりに、攻撃力を失ってしまいます。
戦士が盾を持つことと、同じですね。戦士は大剣ならば攻撃力は、高いです。同じく剣を2本使うと、戦い方が増えて、強いですね。しかし、「守り」という観点では、前者も後者も劣ってしまいます。
それを補うために盾を持たせると、大剣は持てなくなり、剣は一本に限られます。
このように、防御のこととしてとらえると、同時に攻撃力も失ってしまうので、この周濠を、戦いに生かしていたというのは、少し考えにくいかなと思います。
ですが、必ずどこかに理由があったと思うので、考えてみたいと思います。
そこで調べていくと、農業目的ということがわかりました。
これは、非常に興味深いなと思いました。
実際に大山古墳にも水路が引かれていたので、現実性が高いなと思います。農業に利用するというのは、家来だけでなく、豪族及び市民にとって、メリットが大きいため古墳つくりに賛成する人も多いし、合理的であると思います。
しかし、戦いに生かすという理由もあったと考えられませんか？先ほど戦いに生かすのは難しいといいましたが、ほかの観点で活かせたと考えることは可能です。説明すると、当時の防具は、金属製の短甲でつくられています。水にぬれれば、当然錆びますね。
しかし、考えてほしいのは、ここから、錆びれば、相手の財政は厳しくなります。それもそのはず、水に落ちれば(周濠の落ちる)戦いの途中でもしくは、何らかのタイ

ミングで短甲が錆びます。そうすれば敵側としては、次の戦いまでに短甲を用意しとかなければ、いけないわけです。ならば、出費はかさみます。戦いで、直接的に勝っていなくても、少しずつ優勢になっているわけです。さらに、濡れると、体温の維持が厳しくなるため、古墳の構造を知っている相手はとても有利となります。このように周濠も見方を変えれば戦いに活かせたと考える事ができるでしょう。
このように、戦いに活かせたというのは現実的です。
しかし、古墳時代の後期から末期にかけては、戦いに弓が導入されたといわれています。弓が導入されれば、古墳を、戦いに活かすのは、難しいのでは？という考え方があるかもしれません。
しかし、引用すると“古墳時代や奈良時代の上長下短の長弓は，葬儀用あるいは国家儀仗用の非実用弓であった。狩猟や戦闘用の実用弓としては，集落出土の簡素な非長弓が用いられていた。”とされています。これならば、今まで通りの考え方で、周りを見たり、高地という面では、大きい古墳は戦いにも利用できたと考えることもできるし、古墳の真意も見えてきたかと思います。
このように、徹底的な証拠を得ることは出来ないが、様々な観点から、戦いに応用できる、という考え方も皆さんの中に取り入れてみては、いかがでしょうか？
また、ほかにもまだ謎多き古墳の真意がわかるかもしれません。

～まとめ～

古墳が戦いに応用されていた可能性は高いです。

そして、完全に個人の感想ですが、その古墳は、大王の墓としての目的、大王が権力を示す目的、農業としての目的、視察としての目的、埴輪を用いて、戦場としての目的、など、以下の観点から、古墳を戦いに応用されていた可能性は高いと考えられます。

～感想～

この研究は確実なデータが得られないため、とても難しいですが、実際に古墳に行ってみたり、事実と感想を区別して調べることが出来たと思います。
調べた後ですが、ほかにも調べたいことが出てきたので、研究を通して、非常に古墳に対して興味を持つことができたと思います。調べられる恵まれた環境があることに感謝し、古墳、という先人が残してきた、遺跡を自分たちも引継ぎ広めていかなくてはいけないと思いました。
ここでようやく感想を述べられるので、研究に関することも話していきたいと思います。
今回の研究は、古墳を戦いに活かすという言葉をキーワードにして進めてみましたが、自分自身、古墳を戦いと結びつけるのは、すこしどうかなといった面もありました。
それは、豪族の偉い方の墓ですし、自分なら、その上で戦うのはすこし遠慮するかなと思いますね。まだ昔の事は完璧に解明されていないのでわかりませんが。
事実無根というわけではないので、これからも少しずつ確立させるために古墳に興味を持ち続けて行きたいと思います。

引用、参考文献

http://www.chikatsu-asuka.jp/?s=child/04how

https://chikyumori.org/2019/07/06/%E5%B7%A8%E5%A4%A7%E5%8F%A4%E5%A2%B3%E3%81%AE%E5%BD%B9%E5%89%B2%E7%AC%AC1%E5%9B%9E/htt

ps://field note.info/page-28/page-138/

https://www.touken-world.jp/tips/43159/

https://fieldnote.info/page-1424/page-1385/#:~:text=%E5%8F%A4%E5%A2%B3%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%82%84%E5%A5%88%E8%89%AF%E6%99%82%E4%BB%A3,%E3%81%8C%E7%94%A8%E3%81%84%E3%82%89%E3%82%8C%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%9F%E3%80%82